

時間としぐさの違い

7年前、スペインに留学し最初に直面したのは時間についての感覚の違いでした。アパートに電話を設置する際のことです。設置は日本の場合のようにわざわざ電話局に行かなくても電話で申し込みができました。住所、氏名、パスポート No. 取引銀行名・支店名、口座番号を知らせるだけでよかったのです。私はさっそく携帯電話から申し込み、取り付け日の約束もしました。そのとき担当者からは、2日後の午後6時にアパートに来ると返答があったのです。

指定の日、私はどこにも出かけずに家でずっと待っていました。ところが、6時を過ぎても7時を過ぎてもやってきません。念のため終業時間の8時まで待ってみましたが現れません。しかも何の連絡もないのです。局では私の携帯電話の番号を知っている筈でした。

翌日、再度、局に電話をしました。電話口に出た担当者は「バレ、バレ(了解、了解)、明日6時ごろには行くからね」と。さてその翌日です。どうなったと思います?なんと、また現れなかったのです。

その次の日の朝、私は少々の怒りで脅し言葉を使って、再び催促の電話を入れました。その結果か、ようやく正午近くに担当者がやってきて、設置は何とか順調に済んだのです。でも、約束どおり来られなかったことに対する、納得のいくような説明はありませんでした。

私はここでお世話になったスペインの悪口を言おうとしているのではありません。遭遇した事実をそのまま綴っただけです。たぶん、たまたま当たった担当者が特殊な状況下にあったか、あるいはこれは極端で例外的なケースだったのかもしれませんが。

かつて特派員として中南米を回っていた時にも、同じような体験をしたことが何回もありました。そこで、私はスペイン語圏で最も使われる挨拶言葉「アスタ・マニャーナ」について、自分なりの新たな解釈を作り上げたのです。

「アスタ・マニャーナ」とはスペイン語で「明日まで」または「明日また」といった意味です。私はそれをもじって「五つの『あの原則』」を編み出したのです。

『あせらず』『あわてず』『あくせくせず』『あてにせず』、けれども決して『あきらめず』——。この「五つの『あの原則』」を心にとどめている限り、仮に思うようにことが運ばなくてもイライラしないですむ、ということなのです。

「アスタ・マニャーナ」とはすることを先に延ばしているのもあって、決して「やりません」とは言っていない。その意味では、相手も自分も傷つけない優雅な言葉なのです。そんなアスタ・マニャーナのリズムで動いている国に、せかせかした日本式リズムで飛び込めば、時間の歯車がかみ合わず、ギアがかけたり、空回りするのが当然の成り行きかもしれないわけです。

かつて私が訪れていたラテン・アメリカでは、勤務の終了時間がくると、仮に仕事が途中

であっても、皆サッと引き上げていました。残った仕事は「アスタ・マナニャーナ」でよいのです。それよりも自分の生活を楽しむのが大切なのです。

ところが、日本からの出張社員また駐在員は、そうはいきません。本社との交信に「時差」の問題もありますが、夜遅くまで明かりのついているビルの事務所といえば、たいがい日系企業との相場でした。そうした人々のご苦勞で本社も日本の経済も発展してきたとも言えるでしょう。

その一方で、スペイン語圏の国の人々の生き方を見ながら、経済的な効率だけを考えて、時間に正確で、時間に支配されているような日本人の生き方も、時代に合わせて見直してみることも必要かもしれないと思ったところです。

電話設置のケースは例外としても、ときどき、スペインやラテン・アメリカの、時間ややルーズな生き方のほうがユーモアがあり、生きていく上の穏やかさがあるように思うこともあります。つまり、ここでは「人間が主人で時間が従者」になっているのです。それに比べると、日本人の生き方は「時間が主人で人間がその従者」とも言うことができるかもしれません。

エッ日本じゃキスしない？！

一般にスペインもラテン・アメリカの人々もしぐさ、つまりジェスチャーは、非常にあけっぴろげで、楽しく、ダイナミックのように見えます。友人同士が街やパーティなどで行き会ると、抱き合い、両頬にキスし、自分の気持ちや感情をストレートに表現しています。

話をしているときも同じです。みんな、顔を動かし、手を動かし、体を動かし、さまざまなジェスチャーを伴っています。スペインに何年か住んでいたある日本の女性作家が、この抱擁とキスについて次のように書いていました。

「スペインでは、遅れてパーティに駆けつけようものなら、そこにいるアミーゴ（友人）とキスをしまくらなければワインにもありつけない」

表現はやや大げさかもしれませんが、現地に住んでみると、彼女の言わんとすることがよくわかるような気がします。

これとは反対に、日本人のしぐさ、ジェスチャーは大変に小さく奥ゆかしいですね。道路や会合で知り合いに行き会ると、われわれの挨拶というのは、挨拶の言葉と一緒に頭を下げるだけです。もちろん、人によっては握手をすることもあります。でも、一般に年配の人はこうした習慣を持ち合わせていません。こういう人にとっては、人前で抱擁したりキスしたりするのは、はしたない、恥ずべきこと、慎むべきこと、といった感覚さえあるのです。これは、昔からの日本の伝統、しきたりから来たものでしょう。

でも、私には、体温のぬくもりが伝わる抱擁やキスの挨拶のほうが、二人の間に冷たい空間を置いた日本式の挨拶より、愛情と親密感が伝わるような気がします。

このしぐさについては、マラが大学のクラスにいるとき面白い発言が飛び出しました。クラス仲間は十数人ですが、国籍も十を超えて多彩です。

突然くしゃみが出そうになった。そのとき各国ではどうするか。スペインでは両手を口元に持っていく。もちろん、他人に飛ばないようにとの心遣いです。ところが、スウェーデンからの学生は言うんですね。「われわれは、すぐ腕の肩に近い部分を口元に持っていくよ。だって、手は他人と握手をする。相手に対して汚いではないか」と。

「ハクション」を活字にした表記も「ハッチ」とかいろいろです。くしゃみが出ると、たいがい、周りの誰かが「ヘスス」とか「サルー」といった声をかけます。「お大事に」との意味ですが、仏教徒の自分には「ヘスス（イエス・キリストの意）よりも「サルー」（健康の意）と声をかけてもらったほうがいいような気がしたものでした。

抱擁とキスについては、そのやり方について、喧々諤々（けんけんがくがく）の意見が続出しました。「そういえば、男同士キスする国も結構あるじゃないか。よくテレビで政治家同士がやっているのを見るし・・・」

私が日本人の挨拶や習慣についての話を終わった後の彼らのとどめの質問、というよりも驚きの感嘆符は、「ええ！　じゃあ、日本では親子の間でもキスをしないの?!」でした。